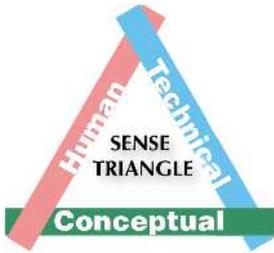


みんなで創る研修所

研修をもっと身近に、もっとみんなで



けんしゅう

令和6年
6月発行

No. **126**

宮城県市町村自治振興センター・宮城県市町村職員研修所

〒981-3341 富谷市成田二丁目22番地1(東北自治総合研修センター内)

TEL:022-351-5781 FAX:022-351-5780 E-mail:moushikomi@thk-jc.or.jp

<http://www.thk-jc.or.jp/sityouson/index.html>

本格的に、研修スタート！ ～ 本年度は専門研修をさらに拡充 ～

令和6年度が始まり約3ヵ月。研修所では「研修担当職員研修」を皮切りに、順次、研修がスタートしています。今年度は階層に応じた階層別研修に加え、ニーズの高い専門研修や職場の指導者フォロー研修を拡充して行います。まちづくりに奮闘する皆さんの成長を、研修機会を通して応援していきます。



最終日には、全員が講師として模擬講義を体験(写真下)

紙を使った※アイスブレイクのグループ演習(写真上)
※受講者の緊張を解きほぐすために行う手法



「公務員としての使命」指導者養成研修

職場の指導者、講師として活動するための知識技能を習得しました。(5月29日～31日 301研修室)



条例・規則作成研修(基礎編)

条例・規則の立案形式を学び、改正実務の実践・演習を行いました。(5月9日・10日 講堂)



「組織マネジメント」でのグループ演習の様子



管理者研修Ⅰ

今年度の初めての階層別研修。課長補佐職に求められる役割を学びました。(5月15日～17日 101研修室)



グループ内で模擬プレゼン(写真下)

「活舌法」訓練は継続がカギ(写真上)

プレゼンテーション研修

伝えたいことを伝えるには?説明・提案場面で必要な知識・技能を訓練しました。(5月13日・14日 301研修室)

自治とは何か？『地方自治制度研修』～ 自治体の過去・現在から未来を考察 ～

近年の地方自治法改正の趣旨を踏まえ、これまで積み上げてきた地方自治制度を再認識しました。その上で、未来の地方自治・自治体の存在意義を考えました。講師として登壇されたのは石山英顕さん（東北大学大学院法学研究科教授）と今井照さん（元福島大学行政政策学類教授）。自治体とは何か。改めて「気づく」貴重な機会になりました。

(5月29日・30日 302 研修室)



石山
英顕さん



熱心に受講する皆さん



今井
照さん



研修所 de パチリ! ①

新・研修スタッフをよろしく

今年度の宮城県市町村自治振興センター・宮城県市町村職員研修所職員一同です。(右表4月1日現在) 新旧ともども、どうぞよろしくお願ひいたします。



新たにお迎えした関内 秀博さん〈大衡村〉(右)
佐藤 彰斗さん〈気仙沼市〉(左)

所属・職名	氏名	派遣元など
事務局長兼研修所長	後藤 光彦	登米市
事務局次長兼総務課長	関内 秀博	大衡村(新)
総務課事務員	柳沼 美和	
研修所次長兼研修課長	加藤 陽子	石巻市
研修課主査	岡崎 恵太	七ヶ浜町
主事	早坂 凌	富谷市
主事	小野寺 優太	美里町
主事	佐藤 彰斗	気仙沼市(新)
調査研究員	丹野 修	
調査研究員	本田 幹枝	
研修課事務補助員	尾崎 京子	

シリーズ【研修事始(けんしゅうことはじめ)①】

木も、森も

細部にこだわりすぎて全体や本質をつかまないことを「木を見て森を見ず」という。自分では気づかずに、このような状態に陥っていることがある。ある時上司から「もっと遠くを見ろ」と言われて、はっとしたことを覚えている。

森を「あるべき姿」と描いて、次に実現のために、どんな木をどのように育てていくかなどの策を講じていく。自治体現場では、いずれも待たなし、だ。

近頃、剪定作業に追われ、森を眺める暇がない忙しい方にこそ、研修に足を運んでほしい。「木も見て、森も見る」。視点を交える契機になるはずだ。

調査研究員 本田 幹枝



第Ⅲ期専門研修☆ご案内

現在、下記「第Ⅲ期専門研修」をご案内しています。研修内容など、詳細は公式ホームページに掲載しています。

なお、受講要件などについては、貴団体の研修担当にご確認ください。

- ◆私債権管理・回収 (9/19~9/20)
- ◆行政法 (9/5~9/6)
- ◆クレーム対応 (9/10~9/11)
- ◆折衝力・交渉力 (10/8~10/9)

編集後記

■新緑の季節となりました。木々が青々とし、心地よさを感じているところです。さて、先般の研修担当職員研修では、研修への「動機づけ」に触れました。本紙は、「動機づけ」の一端を担えるよう発行していきます。ぜひ、ご活用ください(優) ■現代人の一日の情報量は江戸時代の一年分、平安時代の一生分だとか。古今東西「伝わっているか」は、送り手側の永遠の課題。紙面へのご意見・ご感想をお待ちしています(幹)

